

生涯教育と学校教育

角 替 弘 志

(静岡大学)

教育は学校において行われるものであり、かつ、青少年期に集中して行われるものであるという観念が、わが国においては、明治以降その制度の確立と相まって、深く人々の間に滲透した。それゆえ、生涯教育に関しても、現実には青少年期においては学校において十分な教育がなされているのだから、生涯教育は学校教育修了後の成人期の教育の問題であり、学校は関係がない——生涯教育ということで成人が学校に入ってくることは、現に確立している学校の秩序をむしろ混乱させることになる——という理解や、生涯にわたって学校教育を継続することは大変なことであり、人々にとっては耐えられないことだ——物理的に不可能というだけでなく、教室に縛られ、外からの指導によって受身的に勉強させられるという状況が生涯にわたって継続することは耐えがたいことだ——という批判さえも生じてくる。

生涯教育は「生涯学習（各人が自発的意思に基づいて、必要に応じ、自己に適した手段・方法を選んで、生涯を通じて行う学習）のために、自ら学習する意欲と能力を養い、社会の様々な教育機能を相互の関連性を考慮しつつ総合的に整備・充実しようとする」ものであり、「国民の一人一人が充実した人生を送ることを目指して生涯にわたって行う学習を助けるため」の仕組みである（「生涯教育について」）。そして、学校については、「学校教育は、すべての国民に対して、その一生を通ずる人間形成の基礎として必要なものを共通に修得させるとともに、個人の特性の分化に応じて豊かな個性と社会性の発達を助長する、もっとも組織的・計画的な教育の制度である」（「今後

における学校教育の総合的な拡充整備のための基本的施策について」と説明されている。学校（特に義務教育の場としての学校）が生涯にわたる活動（生活）の基礎的能力を培う場であることは自明であり、誰もがそのことを納得している。そのことからすれば、どのような批判があろうと、学校教育は常に生涯教育をふまえて行われなければならない。

しかし、フォーマルな教育としては、歴史的に学校教育のみが確立してきたという状況のなかでは、多様な教育形態が社会的に定着する過程において、学校の位置を十分に検討しなければならない。

シンポジウム「生涯教育と学校教育」は真野宮雄氏（筑波大学）と筆者の司会によって、「教育内容の側面から」桑原敏明氏（筑波大学）が、「学校経営の側面から」林部一二氏（帝京大学）が、「教師教育の側面から」俵谷正樹氏（兵庫教育大学）が提案し、現実の学校教育を手掛りとしながら、統合された生涯教育の場としての学校の可能性を探ったのである。

1 学校教育の自己目的化の問題

学校教育の普及は当然国民の教育水準の向上につながるものである。しかし、学校への就学率が高まり、在学期間が長くなれば、それだけで、人びとの調和のとれた発達が可能になるわけではない。学校教育がそれ自体で目的化してしまうという問題が一方において生じてくる。すなわち、「高学歴化は学習意欲や学習能力の高いひとびとが多くなることを意味するので、ひとびとが要求する学習内容は当然高くなる。その反面、学校教育が負担過重に陥ったり、学校生活に適応できない学生生徒が多くなったりすることもある。」（「急激な社会構造の変化に対処する社会教育のあり方について」）「学校教育が普及し……18, 19歳層でも約半数がまだ実社会に出ない状況にあり、多くの青少年に社会の一員としてすすんで行動しようとする態度の形成の遅れがみられる。また、高校、大学などへの進学過程において、いわゆる学歴偏重の風潮や過度の受験競争などが青少年の人間形成に影響を及ぼし

ていることも指摘されている。」(青少年の徳性と社会教育)「我が国には、個人が人生の比較的早い時期に得た学歴を社会がややもすれば過大に評価する、いわゆる学歴偏重の社会的風潮があり、そのため過度の受験競争をもたらすなど、教育はもとより社会の諸分野に種々のひずみを生じている。」(「生涯教育について」)という指摘が一般化している。「我が国では……初等中等教育段階における学校教育は著しく普及しており、この時期の子供の教育において重要な役割を担っている」が、その学校において「従来ややもすれば既成の知識を与えることに主眼を置く傾向が強かった」し、「とりわけ中学校及び高等学校教育は、受験競争等の影響の下で知識の詰め込みに偏りがちで、人間性の陶冶の面が不足していることなどの弊害も見られ」、さらに、過度の受験競争の影響のみならず、子供の教育にとって好ましくない一部の社会環境の影響、家庭や学校における教育的配慮の不十分、不適切な場合もみられ、「このため、ともすれば心身の調和のとれた子供の成長・発達が損われがちであり、また、いわゆる登校拒否や暴力行為などの不適応ないし反社会的な行為が一部に現れている」(同前)という看過することのできない状況がみられるのである。

教育の究極的な目的は、誕生直後からの学習者の生命力と学習力とをバネにして、自己教育力(＝生涯学習力)をつけることであり、児童・生徒は、全生涯にわたる全生活の主体として成長することのできる学習をする、という発達課題をもっているのである(桑原氏)。このことからすれば、現在の学校教育は学校に期待された機能の一部に焦点が合わされ過ぎ、その部分が肥大化し、全体としてのバランスを失しているという状態になっているといえる。本来、学校における教育は青少年期における教育の一部であるという暗黙の了解があり、その前提から特に意図的・計画的な教育が求められる知的教授を学校が行った。しかし、結果的には、学校が知的教授の場であるという性格を保持しながら(あるいは、より一層強調しつつ)、学校が青少年期の教育のすべてとして機能するようになったことに問題はあった。従来、従ずしも自覚されてはいなかったものの、家庭生活、地域社会の

生活そのものが青少年の人間形成に大きく作用していたが、今日では、多くの青少年の生活にとって家庭や地域社会は時間的にも空間的にも（量的にも質的にも）その占める割合は極めて縮小され、その結果、人間形成に果たす役割も減少した。したがって、必ずしも自覚はされていなかったものの重要な家庭や地域社会の人間形成の作用をどこでどのように行うかという課題が生じてきた。

このように考えると、青少年期においては十分に教育機会が用意され現実には組織的な教育活動が行われているので、生涯教育の問題は、学校教育修了後（あるいは、学校を離れた）の青少年あるいは学校とかかわりを持たない成人に対する教育の問題として検討すればよいとする議論は成り立たなくなってくる。学校教育のあり方自体が生涯教育の問題として問われなければならない。ただそのためには、生涯教育の理念が一層深められなければならない。一方において「生涯教育に関しては、議論の時期は過ぎた、実践こそ求められている」という主張もあるが、生涯教育が現実の教育の仕組みに新しい教育機会を単に付加するのではなく、現実に存在する教育の仕組み（制度）の再構成を含むものであるとすれば、生涯教育とは何かについて一層深めた論議が必要であると言わざるを得ない。

学校についても、「学校経営における生涯教育の導入の困難さ」が「①学校経営は生涯教育時代において何ができるか（ア 生涯教育の目標から従来の学校経営の目標をどう改めるか、イ 生涯教育に対する学校教育の責任分野を明確にする）」「②生涯教育の立場から学校経営に何が要求されるか（ア 校外活動の学校の教育課程化をどう進めるか、イ どのようにして教職員に生涯教育と学校教育との関係を理解させるか、ウ 生涯教育を学校経営に取り入れるには、具体的にはどうすればよいか、エ 学校経営における社会教育へのサービスには限界がある、オ 社会教育から学校経営へ何を取り入れられるか）」の諸点から指摘されている（林部氏）。生涯教育への対応という点では、学校が最も後れているのではないか、という見方もあり、「現段階では、一般的に、生涯教育について学校関係者が最も無知（授業が多忙であ

り、かつ、学習の機会と指導者がいないのがその一つの理由であり、児童・生徒の校外活動にブレーキをかける教師が多いというあらわれである)」であり、「依然として学校教育第一主義を信じ、社会教育への不信感を持つ教職員が多い（社会教育・家庭教育の教育的効果が理解できない教職員が多い）」という厳しい批判がみられるのである。ただ、学校に対する批判が学校教育関係者と社会教育関係者の反目や不信感を生みだすとすれば問題である。学校教育関係者の側においても、「観念的には学校教育への生涯教育理念の導入の必要性は良く理解できる。しかし、現実には受験、非行、施設・設備管理等の直接に対応をせまられている目今の深刻な問題をおろそかにすることはできない。具体的な方法が確立していない以上、生涯教育、学・社連携という考え方の導入が、児童・生徒の学習を散漫にし、交友関係、世間の風潮を含め社会の望ましくない影響に児童・生徒をさらすことになり、社会とのかかわりを密にすることによって学校の秩序が乱される、という恐れがないとは言えない。」という危惧の念が根強く存在しているのである。

2 生涯教育制度をふまえた学校教育のあり方

学校教育への生涯教育の導入は、理念の問題としてだけではなく、具体的な実践の方法の問題として一層、積極的に検討されなければならない。ただ、「ルソー、ペスタロッチ、デューイ等の教育学の古典を玩味しよう」（桑原氏）と提唱されるように、学校教育の基底には生活主体としての人間の教育という課題が常に存在しているのであり、新たな方法の導入は決して従来の教育実践との断絶を意味するものではない。

生涯教育の観点に立った学校教育とはいかなるものであるかについての具体例が示されることは、その実践化には極めて意味のあることである。兵庫教育大学大学院はリカレント教育の先駆的試行であるとされる（俵谷氏）。兵庫教育大学は「主として現職教員の学校教育に関する高度の研究・研鑽の機会を確保する大学院と、初等教育教員を養成する学部を置き、全体とし

て、学校教育に関する理論的、実践的な教育研究を進める『教員のための大学』、学校教育の推進に対し『開かれた大学』として構想された大学であり、学校教育研究科（修士課程）は「入学定員の3分の2程度は初等中等教育における3年以上の教職経験を有する者をもって充てることになっている（昭和57年5月1日現在、修士課程在学学生は462名）」のである。これは、高等教育機関における試みであるが、学校教育が青少年期に終了すべきものでなく、生涯にわたって継続するものであること、そのための有給教育休暇制度の一つのあり方を示していることにおいて、初等中等教育とも共通するものを含んでいる。ことに現職の初等・中等学校教員を対象としていることで、この大学院での学習経験が児童・生徒の教育に生かされることが期待される。自らの体験に基づいて、人間の生涯というスパンで児童・生徒の教育を考え、実践することが期待されるのである。

学校の教育は学校社会においてのみ通用する能力を育成するものではない。学び方の学習が強調されるのも、学校においては、生涯にわたって自発的な学習意欲を持ちつづける「誇り高き独学者」を育成することが目標とされるべきであるからである。学校教育は社会教育と交流する教育であり、社会教育に継続する教育でなければならない。

児童・生徒が、学習の必要と喜びを体感するのは、児童・生徒ひとりひとりが自己の生活を満喫し、かつその生活の必要から生じる課題を自主的、個性的に解決していく時であると考えられる。それゆえ、学校の教育活動も、「児童・生徒の生活体験を教材化することによって、実生活への知識・行動力・感受性を指導するとともに、生活自体をも活性化させる」ことが土台とならなければならない。すなわち、児童・生徒ひとりひとりの個性的学習とその交流を豊かにすることが、学校教育においても重視されなければならないし、学び方の学習の中心的内容は、①学習用具としての基礎知識（3R's）、②学習メディアの利用と開発の方法、③学習成果の発表法、を獲得させ、それに習熟させることにあるが、その方法の要諦は、児童・生徒の個人的・集団的な自発的自主的学習を学習指導の基礎に据え、自主学習の体験を奨励

し、方向づけることによって、これを蓄積させ、習慣づけることにあとを言うことができる。

しかし、そのためには、学校経営において、これまで以上に自由で余裕のある発想が求められる。学校の経営方針の樹立のためには各種のアイデアを取り入れることが求められるが、それには学校自体の努力のみならず、教育行政からの奨励と援助が必要である。また、学校教育の生涯教育化の具体的実践のためには、①学校教育と社会教育の両関係者による共同研究、②学校教職員の研修活動、③学校外教育活動の教育課程化の研究（セカンドスクール・社会教育施設の積極的利用とその教育課程化、勤労体験活動、野外教育の奨励、地域人材銀行の活用、社会教育の行事の見直し）、④各種の学校における学校開放事業の推進（小・中・高等学校の校庭・図書館・教室・教育機能の開放）、⑤PTA活動への教職員の積極的参加、⑥教職員のボランティア活動の気運（ボランティア活動のネックの排除、児童・生徒のボランティア活動、社会教育関係団体への参加の奨励と評価）、⑦学校教育（主として実業高校）と企業内教育の連携、⑧学校経営から教育経営へ（学社連携、青少年健全育成事業への取り組み）の諸点が積極的に推進されなければならない。

3 学校への期待

人々の有している能力（顕在化しているもののみならず潜在しているものも含めて）を最大限に育成し社会的に役立てることが教育であるとすれば、その仕組みは生涯にわたって（時間的）、生活のあらゆる場（空間的）に用意されなければならない。わが国において、それまで意図的・計画的な教育（フォーマルな教育）の効果を高く評価し、その能力形成作用を重視したことは適切であったとしても、結果的には、そのことが教育は意図的・計画的にのみ行われる作用であり（その意味で学校でのみ行われる作用）、教師が専ら行うべきものであるという観念を強めたとみることができる。学校では

（特に青少年期の幼児・児童・生徒を対象とした）そこに在学する者に対し、人間形成にとって必要、十分な教育がなされるのであり、教師はそれに取り組むものとさえ考えられている。しかし、現実には、児童・生徒ですら学校でのみ生活しているのではない。家庭の中で、地域社会の中で、多様な複雑な社会的関係を持ち、なんらかの役割を果たしている。そのことが、人間形成的機能をも同時にもっている。そして、余裕のある今日では、そこに意識的に教育的機能が加味されている場合さえある。

生涯教育の観点にたつということは、学校教育に関しては、学校に期待される教育上の枠組みを厳密に吟味することである。家庭のものは家庭に、社会のものは社会に、そして、学校のものは学校に帰せられなければならないのであり、そのためには、家庭・社会・学校相互に本来の協調を生みだすだけの信頼感の存在が不可欠である。学校に最も期待されることはその相互の信頼感を生みだす源泉となることである。